東京未来大学研究紀要　2011年　第4号　pp.27-35

青年期女子の母娘関係と対象関係

井梅　由美子

Mother-Daughter Relationships and Object Relations in Female Adolescents

Yumiko Iume

要約

本研究では，幼少期，および現在の母親との関係性が対象関係に及ぼす影響について検討することを目的として，女子大学生138名を対象に質問紙調査を実施した。幼少期の親子関係についての3因子と，現在の母子関係についての3因子，および対象関係の5下位尺度（「親和不全」「希薄な対人関係」「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」）を用いて分析を行った。主な結果は以下の通りである。1）概ね，幼少期の安定的母子関係は良好な対象関係に，拒否的および，アンビバレントな母子関係はその逆の関連性が見られた。2）幼少期の安定的，および拒否的な母子関係の多くは，現在の母子の親密性等を介して，対象関係に影響しているのに対して，幼少期のアンビバレントな母子関係は，対象関係の各下位尺度に直接影響していることが分かった。3）対象関係の下位尺度によって，母子関係の影響の仕方が異なり，それぞれの下位尺度の特徴を表す結果が得られた。

キーワード

対象関係，青年期，幼少期の母子関係，現在の母子関係

問題と目的

対人関係の問題は私たちの心理的適応を考える上で重要な要素の一つである。特に青年期以降，友人関係，異性関係等，多様な対人関係を持つようになり，他者との関係性は人格形成において重要な意味を持ったり（たとえば，Sullivan, 1953のchumship），適応感に影響を及ぼしたりする（たとえば，黒田・桜井, 2003；岡田, 2007；井梅・青木, 2010など）。また，ソーシャルサポートの考えに代表されるように，対人関係は我々の心理的適応の重要なサポート源でもある（たとえば，中西, 1998；荒牧・無藤, 2008）。このような個人の適応を考える上での対人関係の問題，あるいは対人関係のありようについて，精神分析的な治療理論では，対象関係という概念で扱ってきた。対象関係は自己と他者との関係性に関する概念であり，「対人場面における個人の態度や行動を規定する，精神内界における自己と対象（他者）との関係性の表象」と言うことができる（藤山, 2002）。こうした関係性についての表象は，実際の対人関係に影響を与える。例えば，対人場面においてトラブルを起こしやすかったり，対人的な葛藤を多く抱えている人は，他者に対する認知が実際のその人と著しくずれていたりするといったことが考えられ，この精神内界における関係性の表象に何らかの歪みがあると考えられるのである（馬場, 2002）。

対象関係の議論は，これまで主に心理療法における治療的枠組みの中で発展してきたものであり，その評価は面接を通して行われることが一般的である。Bellak, Hurvich & Gediman（1973）は，対象関係を評価する質問項目を用意し，面接においてこれらを全体的に評価して対象関係を査定する方法を提示している。また，ロールシャッハ・テストやTATなどの投映法を用いて，一定の客観的基準を設けて評価する方法などもあるが（Urist, 1977；Westen, 1991），質問紙によるものは数少ない（Bell, 1995, 2005）。面接や投映法は臨床的な治療場面等において多くの情報をもたらすが，一方で，評価に時間がかかることや，客観的な指標に欠けるといった難点がある。質問紙による評定は集団での実施を可能にし，治療の枠を超えて広く予防的な観点から対象関係の理論を扱うことが出来ると考えられる。

そこで，井梅・平井・青木・馬場（2006）では，Bell（1995）を参考に，日本における青年期の対象関係のありようを評価する尺度（青年期用対象関係尺度）を作成した。井梅他（2006）では，因子分析の結果，「親和不全」「希薄な対人関係」「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」の5下位尺度が得られ，NEO-FFI（下仲・中里・権藤・高山，1999）との関連を見るなどして，一定の信頼性および妥当性が確認された。さらに，井梅他（2010）では，中学生を対象に個人のもつ対象関係のあり方と精神的健康との関連を検討しており，対象関係の下位尺度プロフィールから類型分類された“アンビバレント型”“孤立志向型”“対人希求-不安型”では，“バランス型”に比較して，全般的に自身のメンタルヘルスの状態を良くないと訴えていることが分かった。このことから，対象関係のありようは，青年期の精神的健康に関与していると言うことが出来よう。

ところで，対象関係の形成には，早期の人間関係，すなわち幼少期の養育者との関係性が深く関与していると考えられている（Kernberg, 1976）。すなわち，我々が内面にもっている他者に関する表象（対象表象）と，自己に関する表象（自己表象）は，幼少期の実際の人との関係性を通して学習され，「人とはこういうものだ」といった自己と他者との関係性についての表象（対象関係）として個人の内に定着する。このようにして形成された対象表象は，幼少期の養育者との関係だけではなく，その後の人間関係において修正され，より適応的なものへと成熟していくが，そうした表象が現実の他者と著しくずれ，その修正が困難なまま青年期に至った場合，対人的なトラブルを引き起こしやすくなると考えられる。

以上を踏まえて，本研究では，青年期の対象関係に関連する要因として，幼少期の母子関係に焦点をあて，その関連性を見ていくこととする。さらに，幼少期の母子関係はそのまま，現在の対象関係に影響を及ぼすわけではなく，その後の関係性において絶えず修正されながら形作られていくことを考えると，現在の母子関係も対象関係のありように影響していると考えられる。そこで，幼少期の母子関係，および現在の母子関係を評定し，その関連性を検討するとともに，これらが現在の個人の有する対象関係にどのように影響しているかを検討していくこととする。なお，本研究では女子青年を対象に調査を行った。これまでの研究でも青年期の母子関係のあり方には性差があることが示されており（岡本・上地, 1999；小山, 1999），また，女性の発達においては，関係性の視点が重要であることが指摘されている（斉藤, 1990；杉村, 1999）。そこで，本研究では，研究の第一段階として母娘関係に焦点をあてて見ていくことにする。

方　法

調査対象

関東の女子大学に通う学生を対象に調査を依頼した。回答に不備のあったものを除き138名を分析対象とした。平均年齢は18.9歳（18歳から21歳，*SD*=0.80）であった。

調査内容

1）対象関係に関する項目

井梅他（2006）によって作成された青年期用対象関係尺度を使用した。この尺度は「親和不全」「希薄な対人関係」「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」の5下位尺度，29項目からなる（付表参照）。“とてもそう思う”から“全くそう思わない”までの6件法で回答を求めた。各下位尺度に対応する項目の得点平均値を各下位尺度得点として使用することとした。

2）幼少期の母子関係に関する項目

酒井（2001）による就学前の母子関係に関する

項目を用いた。この尺度は, Ainsworth et al.（1978）の幼少期の母子関係における，独立した3つの愛着パターンの記述を参考に作成されており,「就学前の安定的な母子関係」「就学前の拒否的な母子関係」「就学前のアンビバレントな母子関係」の3因子，計16項目からなる。“非常によくあてはまる”から“全くあてはまらない”までの6件法で回答を求めた。

3）現在の母親との親密性・依存性に関する項目

現在の母娘関係を評定するため，北村（2001）の現在の母親との親密性・依存的関係に関する項目を用いた。北村（2001）では,「親密性」「過剰な依存」「過剰な世話」の3因子が見出されており，十分な内的整合性が得られている。本研究では北村（2001）で得られた3因子，計22項目を使用し，“よく当てはまる”から“ほとんど当てはまらない”の5件法で回答を求めた。

結　果

尺度の構成

幼少期の母子関係に関する16項目について，因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その結果，先行研究（酒井, 2001）と同様の因子のまとまりが見られたことから，酒井（2001）の3因子を採用した。その際，因子負荷の低かった2項目を除外し，14項目を用いることとした。各因子の信頼性係数αは,「就学前の安定的な母子関係（以下，幼少期安定と表記）」において.80,「就学前の拒否的な母子関係（以下, 幼少期拒否と表記）」で.67,「就学前のアンビバレントな母子関係（以下，幼少期両価と表記）」では.63であった。代表的な項目をTable 1に示す。

Table 1　幼少期および現在の母子関係に関する尺度の代表的な項目

就学前の母子関係に関する項目	
因子１（就学前の安定的な母子関係：5 項目　α=. 80）	
母親と遊ぶのが楽しかった	. 74
私は母親のそばでは安心感があった	. 54
因子２（就学前の拒否的な母子関係：4 項目　α=. 67）	
助けてほしいときに、母親は助けてくれないことがあった	. 75
いつか見捨てられるのではないかと思った	. 57
因子３（就学前のアンビバレントな母子関係：5 項目　α=. 63）	
幼稚園に行っても、母親を思い出してずっと泣いていたことがあった	. 57
母親がそばにいないと、夜眠れなかった	. 49
現在の母親との親密性・依存的関係に関する項目	
因子１（親密性：10 項目　α=. 88）	
母親をうっとうしく感じる（－）	－. 81
自然に母親と温かい関係を保つことができる	. 76
因子２（過剰な依存：4 項目　α=. 67）	
自分の思い通りに、母親が自分のそばにいてくれないとイライラする	. 59
母親がいないと私は何も出来ないだろう	. 58
因子３（過剰な世話：5 項目　α=. 66）	
母親のために自分のことを犠牲にすることはない（－）	－. 67
私は自分のことよりも母親のことを優先する	. 58

（－）逆転項目

次に，現在の母親との親密性・依存性に関する22項目について，因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。その結果，概ね，北村（2001）で見られた因子のまとまりと一致したことから，北村（2001）の3因子を採用した。その際，因子負荷の低かった3項目を除外し，19項目を用いることとした。各因子の信頼性係数αは，「信頼性」で.88，「過剰な依存」で.67，「過剰な世話」で.66であった。代表的な項目をTable 1に示す。

以上，幼少期，および現在の母子関係について，3因子ずつ，6因子が得られた。各因子に対応する項目の得点平均値を算出し，各下位尺度得点として以下の分析で使用することとした。各下位尺度の平均値と標準偏差をTable 2に示す。

対象関係と各変数との関連

対象関係についての下位尺度の得点平均値と，幼少期の母子関係，および現在の母子関係の各下位尺度得点との相関係数を算出した（Table 2）。その結果，幼少期の母子関係と現在の母子関係の間では，「幼少期安定」と現在の「親密性」の間に最も強い正の相関が見られ，一方，「幼少期安定」と現在の「過剰な世話」間にも正の相関が見られた。また，「幼少期拒否」と現在の「親密性」については負の相関が認められた。さらに，「幼少期両価」と現在の「過剰な依存」間にも正の相関が認められた。

次に，幼少期の母子関係と対象関係の関連については，「幼少期安定」では，「希薄な対人関係」，「自己中心的な他者操作」「見捨てられ不安」との負の相関が見られ，「幼少期拒否」と「幼少期両価」では，対象関係各下位尺度と概ね正の相関が見られた。

最後に，現在の母子関係と対象関係との関連については，「親密性」では，全ての対象関係下位尺度と負の相関が見られた。一方，「過剰な依存」では，「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見

Table 2　各変数の基本統計量と相関行列

	M(*SD*)	1	2	3	4	5
1.親和不全	2.99(0.93)	—				
2.希薄対人	4.51(0.85)	.525**	—			
3.自己中心	2.45(0.87)	.333**	.340**	—		
4.過剰希求	2.69(0.88)	.195*	.020	.437**	—	
5.見捨不安	3.65(0.93)	.501**	.279**	.338**	.542**	—
6.親密性	3.84(0.78)	−.320**	−.425**	−.285**	−.185*	−.386**
7.過剰依存	2.52(0.82)	.120	−.032	.244**	.435**	.340**
8.過剰世話	2.88(0.66)	−.126	−.193*	−.034	.130	−.083
9.幼少安定	4.52(0.89)	−.117	−.310**	−.181*	−.111	−.186*
10.幼少拒否	2.24(0.91)	.229**	.290**	.279**	.130	.266**
11.幼少両価	2.96(0.96)	.225**	.018	.346**	.368**	.275**
	6	7	8	9	10	
7.過剰依存	.005	—				
8.過剰世話	.399**	.197*	—			
9.幼少安定	.625**	.154	.340**	—		
10.幼少拒否	−.561**	−.067	−.208*	−.524**	—	
11.幼少両価	.071	.397**	.120	.428**	−.040	

*p<.05　**p<.01

捨てられ不安」との正の相関が見られた。「過剰な世話」では，「希薄な対人関係」でのみ，弱い負の相関が認められた。

母子関係の様相から見る対象関係

幼少期，および現在の母子関係が，対象関係にどのように関連しているかを検討するため，パスモデルを作成し，検討することとした。有意でなかったパスと相関関係を除外し，モデルの修正を行い，最終的にFigure1で示したモデルが得られた。このモデルの適合度は，χ^2（27）= 44.327, p = .019, GFI = .947，AGFI = .871，CFI = .964，RMSEA = .068という値が得られ，想定したモデルは受容できると判断した。

統計的に有意なパス係数に着目し，本研究で構成したモデルを概観すると，「親和不全」に対しては，「幼少期両価」が正の，現在の母子関係での「親密性」が負の影響を及ぼし，「幼少期安定」と「幼少期拒否」は，現在の「親密性」を介して影響していることが示された。次に「希薄な対人関係」では，現在の母子関係での「親密性」からの負の影響が認められ，「幼少期安定」と「幼少期拒否」については，現在の「親密性」を介して影響していることが認められた。一方，「自己中心的な他者操作」に対しては，「幼少期安定」および，「幼少期両価」からの直接的な影響のみが見られた。「一体性の過剰希求」については，「幼少期安定」からは負の，「幼少期両価」からは正の影響が見られ，現在の「過剰な依存」および「過剰な世話」からも正の影響があることが示された。「見捨てられ不安」については，「幼少期両価」と現在の「過剰な依存」が正の，現在の「親密性」が負の影響を及ぼし，「幼少期安定」と「幼少期拒否」については，現在の「親密性」を介して影響していることが示された。

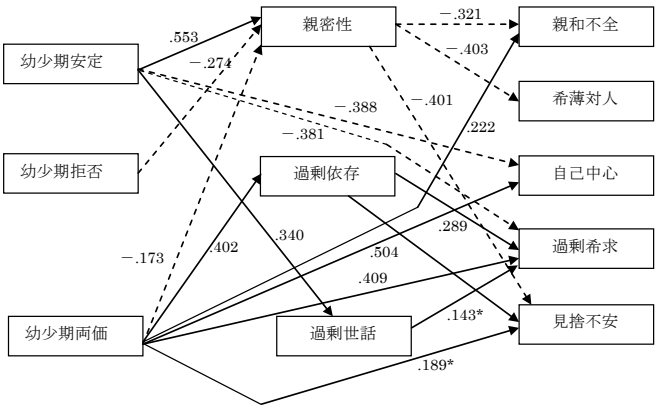

Figure 1　幼少期および現在の母子関係が対象関係に及ぼす影響

注：*p<.05, それ以外はすべて p<.01（有意なパスのみ記載）。図中の数値はパス係数である。実線の矢印は正の影響を，点線の矢印は負の影響をそれぞれ表す。

考　察

本研究では，個人が内的表象としての対象関係を築いていくにあたって，人生早期の人間関係として重要な影響があると考えられる母子関係に焦点をあて，その関連性を検討した。

まず，各変数の相関を検討したところ，幼少期の母子関係と現在の母子関係間で見られた相関関係から，幼少期の安定的で，良好な（拒否的でない）母子関係は，現在の母子の親密な関係の基礎となっていることが示唆された。また，同様の傾向が，「過剰な世話」との関係でも見られた。“自分のことより母親を優先する（「過剰な世話」尺度項目）”などの過剰な関与ともいえる濃密な関係性は，幼少期の母子のネガティブな関係性の現れではなく，むしろ，安定的な母子関係を体験した上で，母親の世話を焼かずにはいられないといった傾向を示していると言うことができよう。小山（1999）でも，一般に不適応に関連すると考えられる母親の過干渉が，母娘関係においてはむしろ，母親が過干渉である方が娘の適応感が高いといった傾向が見られている。昨今，「一卵性母娘」といったことばで表現されるような母と娘の強力な結びつきが注目されているが，母と娘の密接な関係は母と息子よりも社会的にも是認されやすいといった指摘もあり（浴野, 2002；高木,

2008)，今回の結果からも，母娘の密接な関係性が推測された。一方,「過剰な依存」との間には,「幼少期両価」と正の相関が見られ,「幼少期安定」とは関連が見られなかった。“母親がいないと何もできない（「過剰な依存」尺度項目）”などといった現在の不安定な依存的態度は,「過剰な世話」に見られたポジティブな意味での密接関係とは違い，幼少期の母親を求めしがみつくといったアンビバレントな母子関係と関連していることが今回の調査から分かった。

次に，幼少期，および現在の母子関係が対象関係に与える影響について，パスモデルを用いて検討した結果を，いくつかの観点から考察する。

第1に，対象関係への影響を幼少期の母子関係から見ていくと，まず，特徴的な点として，幼少期の拒否的な母子関係は，対象関係の下位尺度のいずれにおいても，直接的な影響を及ぼしておらず，現在の母子の親密性を介して影響していることが分かる(「親和不全」「希薄な対人関係」「見捨てられ不安」)。このことは，過去の母子関係の不全感は，そのまま現在の他者との関係性に影響するのではなく，現在の母子関係のあり方によって，違ってくることを示唆していると考えることができよう。また，幼少期の安定的な母子関係では,「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」で直接的な影響が見られているが,「親和不全」「希薄な対人関係」「見捨てられ不安」では，現在の母子の親密性を介して影響していることから, 幼少期の母子関係の安定についても，ある程度，現在の母子関係に影響を受けながら，他者との関係のありように影響していると言うことができよう。一方，幼少期の両価的感情については，多くの対象関係下位尺度に直接的な影響を及ぼしている（「親和不全」「自己中心的な他者操作」「一体性の剰希求」「見捨てられ不安」)。このことから，幼少期のアンビバントな母子関係は，安定や拒否的関係に比べて，より直接的に対象関係のあり方に関連することが推測される。

第2に，対象関係の下位尺度ごとに，母子関係の影響の仕方を見てみると，まず,「自己中心的な他者操作」では，現在の母子関係からの有意な影響が見られず，より直接的に幼少期の母子関係の影響(「幼少期安定」と「幼少期両価」）を受けていることが示された。こうした結果から推測されることは，本下位尺度が測定している対象関係の側面は，早期の母子関係による影響が強く，現在の母子関係のあり方によって変化することが少ないことが考えられる。一方,「希薄な対人関係」では，幼少期の母子関係からの直接のパスは見られず，現在の親密性を介して影響している。また,「一体性の過剰希求」には,「幼少期安定」と「幼少期両価」および，現在の「過剰な依存」と「過剰な世話」も影響している。「一体性の過剰希求」は，他者との心理的距離が過度に近く，自分の要求や行動を全面的に受け入れてくれる相手を求める傾向を表しており，母娘の過剰な依存と世話がこの下位尺度に関与していることは妥当な結果と考えられる。今回の調査では，さらにその背後に幼少期のアンビバレントな母子関係の関与が推測された（「幼少期両価」から「過剰な依存」へのパス)。これらの結果から，対象関係の下位尺度の特性によって，それまでの母子関係がどのように影響するかが異なっていることが示唆された。

以上，幼少期，および現在の母子関係が対象関係に与える影響について検討した。今回の調査では，幼少期の母子関係について，回想法により評定を求めたため, 解釈には限界があるとはいえる。しかし，総じて，幼少期の安定的母子関係は良好な対象関係に，拒否的および，アンビバレントな母子関係はその逆の影響を与えていることが示され，その影響の仕方は，対象関係下位尺度の特性によって少しずつ

異なることが分かった。今回の調査で得られた結果をもとに，今後さらに検討を加え，その関係性を明らかにしていきたい。

引　用　文　献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S.（1978）. *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

荒牧美佐子・無藤隆（2008）．育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い―未就学児を持つ母親を対象に　発達心理学研究，**19**, 87-97.
（Aramaki, M., & Muto, T.）

馬場禮子（2002）．改訂境界例　ロールシャッハ・テストと心理療法　岩崎学術出版社
（Baba, R.）

Bell, M. D.（1995）. *Bell Object Relations and Reality Testing Inventory*（*BORRTI*）, *manual*. Los Angeles: Western Psychological Services.

Bell, M. D.（2005）. *Bell Relationship Inventory for Adolescents, manual*. Los Angeles: Western Psychological Services.

Bellak, L., Hurvich, M., & Gediman, H.（1973）. *Ego Functions in Schizophrenics, Neurotics and Normals*. New York: Wiley.

藤山直樹（2002）．対象関係　小此木啓吾・北山修（編）精神分析事典　岩崎学術出版社　pp. 315-316.
（Fujiyama, N.）

井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子（2006）．日本人の青年期用対象関係尺度の開発　パーソナリティ研究，**14**, 181-193.
（Iume, Y., Hirai, Y., Aoki, K. & Baba, R.）

井梅由美子・青木紀久代（2010）．中学生の対象関係と精神的健康　心理臨床学研究，**27**，738-743.
（Iume, Y., & Aoki, K.）

Kernberg, O.（1976）. *Object Relations Theory and Clinical Psychoanalysis*. New York:Jason Aronson.
（カーンバーグ, O. 前田重治監（訳）（1983）．対象関係論とその臨床　岩崎学術出版社）

北村琴美（2001）．成人の娘とその母親における相互間のサポート　人間文化論叢, **4**, 119-130.
（Kitamura, K.）

小山（井梅）由美子（1999）。中学生の親子関係と学校適応感についての研究　お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要, **1**, 1-10.
（Koyama, Y.）

黒田祐二・桜井茂男（2003）．中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム―ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討　教育心理学研究，**51**，86-95.
（Kuroda, Y., & Sakurai, S.）

中西雪夫（1998）．乳幼児をもつ母親の育児不安―父親に関する諸要因の影響　家族関係学, **17**, 1-11.
（Nakanisi, Y.）

岡田努（2007）．大学生における友人関係の類型と，適応及び自己の諸側面の発達の関連について　パーソナリティ研究, **15**, 135-148.
（Okada, T.）

岡本清孝・上地安昭（1999）．第二の分離-個体化の過程からみた親子関係および友人関係　教育心理学研究, **47**, 248-258.
（Okamoto, K., & Uechi, Y.）

斉藤久美子（1990）．女性を中心に　臨床心理学大系3　ライフサイクル　金子書房　pp. 163-176.
（Saito, K.）

酒井厚（2001）．青年期の愛着関係と就学前の母子

関係―内的作業モデル尺度作成の試み　性格心理学研究, **9**, 59-70.
（Sakai, A.）

下仲順子・中里克治・権籐恭之・高山緑（1999）. NEO-PI-R NEO-FFI 共通マニュアル　東京心理株式会社.

杉村和美（1999）. 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達　岡本祐子編著　女性の生涯発達とアイデンティティ―個としての発達・かかわりの中での成熟　北大路書房　pp.55-86.
（Sugimura, K.）

Sullivan HS（1953）. *The Interpersonal theory of psychiatry*. New York:W. W. Norton.
（中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎（訳）（1990）：精神医学は対人関係論である　みすず書房）

高木紀子（2008）. 母における娘への思い　柏木惠子・塘利枝子・永久ひさ子・大野祥子・福島朋子（編）　発達家族心理学を拓く―家族と社会と個人をつなぐ視座　ナカニシヤ出版　pp. 38-44.
（Takagi, N.）

Urist, J.（1977）. The Rorschach test and the assessment of object relations. *Journal of Personality Assessment*, **41**, 3-9.

Westen, D.（1991）. Clinical assessment of object relations using the TAT. *Journal of Personality Assessment*, **56**, 56-74.

浴野雅子（2002）. 女子青年の親子関係　岡本祐子・松下美知子（編）　新女性のためのライフサイクル心理学　福村出版　pp. 110-123.
（Yokuno, M.）

付表　対象関係尺度項目

親和不全（6 項目）
　私は人となかなか親しくなれない
　私は他人と深くつき合うことを恐れている
　私には、親しい相手との関係を、自分から切ってしまうところがある
　人のそばにいると、緊張して落ち着かないことが多い
　私は、人とどうやって会ったり話したりしたらいいのかわからない
　私は自分の心に壁を作ってしまい、周りをよせつけないところがある
希薄な対人関係（5 項目）
　本当の自分を理解してくれていると思える人がいる（－）
　私は親しい人（家族や恋人、親友など）に自分の要求を適切に伝えることが出来る（－）
　友人関係は比較的安定している（－）
　私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている（－）
　私には本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる（－）
自己中心的な他者操作（5 項目）
　人との関係で私が重点を置くことは、常に相手より優位な立場になることである
　自分の欲望を満たすために、人を利用することは悪いことではないと思う
　人を思い通り動かすのは、私の密かな楽しみである
　自分が思う通りに人の気持ちを仕向けていくことが、人とのつきあいで重要なことである
　私には、欲求を満たそうとして、自分の思い通りになるよう相手を仕向けるところがある
一体性の過剰希求（6 項目）
　私は完全に一心同体になれる人を求めている
　親しい人とは、何をするにも一緒に行動をしないと気が済まない
　私を本当に想ってくれる人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである
　私は常に誰かといっしょにいないと不安である
　母親なら、私の望みをかなえてくれて当然だ
　親しい人には、自分を“100%”受け入れてもらいたい
見捨てられ不安（7 項目）
　私は他人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい
　身近な人が私以外のものに気をとられたら、拒絶された感じがして傷つく
　何かにつけて置いてきぼりにされそうで、よく心配になる
　ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくことがある
　とても親しい相手であっても、いつか裏切られるのではという不安を感じることがある
　私は人と接する時、相手の顔色がとても気にする
　親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく

（－）逆転項目